

解体工事＆建設リサイクル

専門誌[イーコンテクチャー]

E-Con tecture

Ecology
Construction
Architecture

11

内装からプラント解体まで ～特殊解体の技術と事例～

一歩進んだ建廃対策の実務と規制

木材リサイクルの現状とこれから

[E-Conインテグレー]
中間処理のイニシアチブで解体業、
最終処分面の技術協働促す
＊日本工業大学ものづくり環境学科教授／小野哲郎氏

チップ業者が古材販売を成長させる

●古材.com/監修著者

大阪には、チップ業者が古材の販売を開拓して成長させた事例がある。解体業者は古材を買わなければ事業で実績を持てぬ状況で、古材販売に注力する事で、成長率は2位だ。販売額は、□06-6690-1080が、老舗チップ業者と並んで、古材専門「古材.com」をスタートして古材取引を開始した。より多くの古材を販売しようとしてきたといい。

新規開拓された古材上場機関を見てみると、丸川まで、両家の町(新潟)に「古材店」が存在した。解体工事から古材販売(古材取扱)の発達までの歴史(工事の流れ)など、古材業者も自分で行われた歴史の町で、「古材店」の存在は珍らしく、古材の販売も都会の主導権にあるとは思えない状況なのだ。

空き家の古民家から 回収できない場合も

うまく回収できる場合だけではない。
大阪市東淀川区大坂、淀川河畔に古民家
が残っていた。「古材」今採集するのに

手を困窮工事を行なった。なぜならこまでは古材が多かったから、廃屋状態で手入れがなされないままになってしまった。廃屋状態が悪かった、下見の結果として、使えない。机を立てる事になった。解体に着手しているのは「廃木」といた。廃木自体に手入れで手を入れる。技術的に難治だった。廃木は古材で廃木を作り、工作間で、廻りや外壁の劣化が進むのが少し見えない。

このように解体用意に足を運んでも使えないケースもある。

解体と古材事業はネット販売が基本

前述たレッドタリなどの西濃運輸での「古材」利回りは、今や花見月計りで過言ではない。廃屋解体・施工で文かせない廃材になってきた。廃木やりしの物間作方に一目見ていいのは「古材」の風合いで、地域固有名や未来的の視点からでも「古材」は大切な資源といつていただける。

昔から家庭の解体材を主な原料とした木



材チップを製造して古材チップ業者が、近場のアンティーカーブームで古材チップによる古材の向上という社会的背景を受け、チップとは違った古材の再利用(リユース)を営業できるのではないかと技術的なセミナー大作戦を展開してきた。

その結果が「古材」のネット販売だ。ハリソンが販売して、誰でも簡単に手がけられる。写真や文章を書き込むことができる。古材は日々目に当たることはなかつた。

古材販売と解体業者が一緒に現場に

この事業で一番の課題は、古材の回収だしかし、この点でも、解体はチップ業者でもあり、解体業者とのネットワークがあることが最大の強みとなった。成長して古材のひとつにつき、関連会社の資源流通商(チップ業者)としての存在がある。資源流通商は、大阪のチップ業者の老舗で、数多くの解体業者が本質派の代理店を運営している。資源流通商は、解体業者と古材の販売・卸売業者、資源流通商、生産・加工的骨を担当する、といった構成だ。

古材を得意としていたのは山川、マツヤ解体業者とのネットワークが最も大きだ。それに加えて、古材を見る目が必要になる。そして、古材は資源のあるものに定位しておる。

そこが言いたい 第6回

専門技術が解体木の価値を高くる 古材の目利き人が立ち会い、丁寧に施工

古材の目利き人による解体工事の実例 大阪府立工芸・古材解体工事・資源循環サイト管理者・西村義典氏・内閣府工技院セミナー講師

著者 芝光明氏

かつてチップ工場には、多数の解体事業者が毎日、解体木くずを運び込んでいた。見るからに価値の高いような古木もあった。当時、古材が流通しなかった理由は、古材の価格が不透明で、仕入れ先情報の不足があげられていた。我々は地元大阪の地で、古材が適正価格で取り引きできる環境を構築したいと考えた。

20年ほど前には大阪にも古材販売なるものがあり、柱・梁(はり)・建具・襖(ふすま)・欄間(らんかん)などが販売されていた。この商いは江戸時代から存在しており、この頃から、むだを省く「もったいない」運動は行われていた。古材利用はこの流れを今に引き継いでいるものだと思う。

古材販売をやる前から、店舗・住宅・設計・施工に携わる業者から「柱・梁材を分け下さい」と要望があったが、家屋解体されたままの状態で分けていた。「古材」としての商品化までに至っていなかった。

一般的に古材活用の一番の課題は、材とストックヤードの確保だ。古材の目利きができる人が解体に立ち会わなければならぬ。加えて、解体材は大量に発生する。その中で選別しなければならない。売れるときには1本が何十万円にもなる「古材」だが、基本的に専門の解体業者とのネットワークがなければできない。



芝光明店長

禁で、クレーンで上げてもらわなければならぬ。数多くの解体業者と信頼関係を結んでいることが、大きな財産になっている。こうした解体業者との信頼の深さが、価値のある古材を生み出している。

最近では、古材を求めているお客さんが、実際にヤードに来て見てしまうことが増えている。アンティークブームもあり、レストランなどおしゃれな店舗設計や施工にあって、「古材」は欠かせない部材となってきたようだ。

この事実を話かし、古民家解体工事から産業廃棄物中間処理(チップ製造)・古材販売と一貫体制で吟味された「古材」を誰でも気軽に来店してもらえる古材屋を目指している。

解体業者から、まだ使える素材がたくさんあるとの話をよく聞く。現在、解体業は景気が悪くなると解体コストが圧縮され、工期をできる限り短縮し、早く済ませる傾向

イーコン・インターネット
中間処理の
最終処分
建焼施設は
資源循環

日本工業大学
小野雄策

解体工事業と建設廃棄物
に、新規参入を含めて競争
劇になり、全国的に躍進
している。商業種とも実
技術・技能による差が主流
になり、現状の
経営危機にさらされ
全と廃棄物対策が競
ライアンスの問題
も今まで出てい

今後は壊す解体
従来型の業態から
業ステップへ進
ップのキーワー
定費や維持費